安達太良山の火山活動解説資料（令和８年10月）

仙 台 管 区 気 象 台
地域火山監視・警報センター

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１、図２、図３-①⑤）

若宮監視カメラによる観測では、噴気は認められませんでした。鉄山監視カメラによる観測では、地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

・地震や微動の発生状況（図３-②～④⑥）

地震活動は低調に経過し、火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図４、図８）

火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

・全磁力変化の状況（図５、図６）

全磁力変化から、沼ノ平火口の地下浅部の冷却が進行している可能性があります。



図１　安達太良山　沼ノ平火口周辺の状況（10 月９日）
・若宮監視カメラ（沼ノ平火口の西北西約８km）の画像です。

噴気は認められませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページで閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年11月分）は令和８年12月８日に発表する予定です。
資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、東北大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。
本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の「数値地図50ｍメッシュ（標高）」を使用しています。

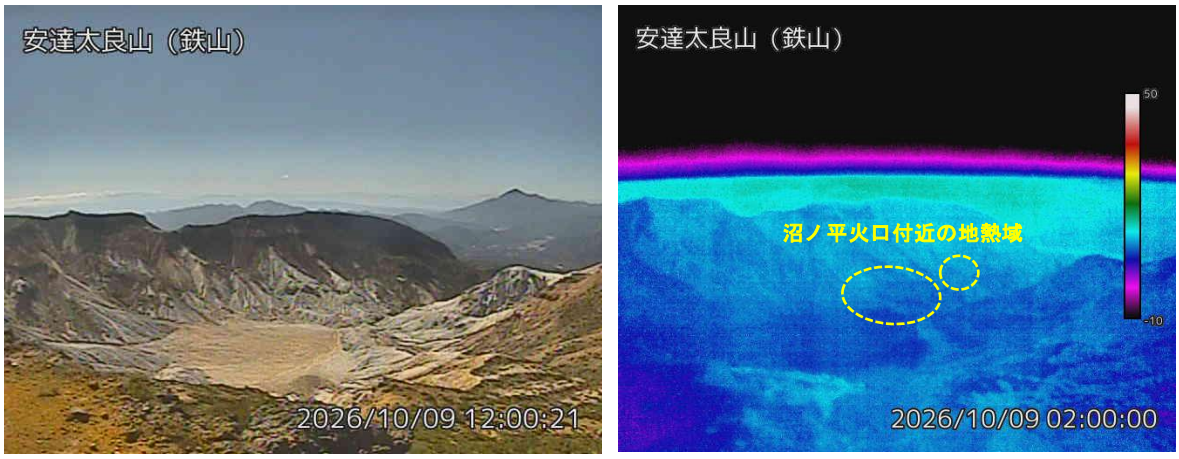


図２　安達太良山　沼ノ平火口周辺の状況と地表面温度分布の状況（10 月９日）
・鉄山監視カメラ（沼ノ平火口の北東約 700m）の可視及び赤外熱画像です。

噴気は認められず、沼ノ平火口付近の地熱域に特段の変化は認められませんでした。

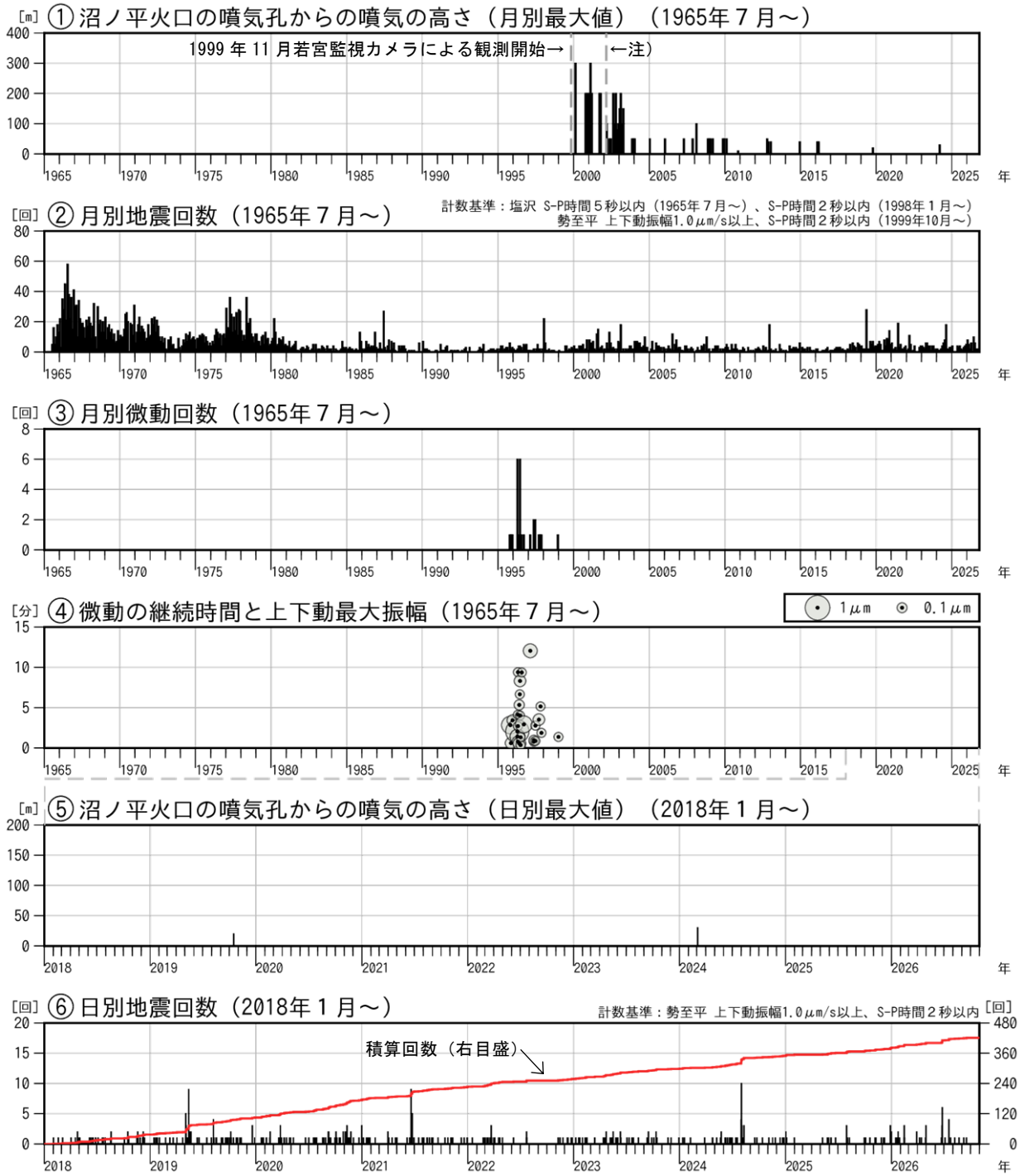


図３　安達太良山　火山活動経過図（1965 年７月～2026 年 10 月）

注）2002 年２月以前は定時（09 時、15 時）及び随時観測による高さ、
2002 年３月以降は 24 時間観測による高さです。

各観測データに特段の変化は見られず、静穏な状態で推移しています。

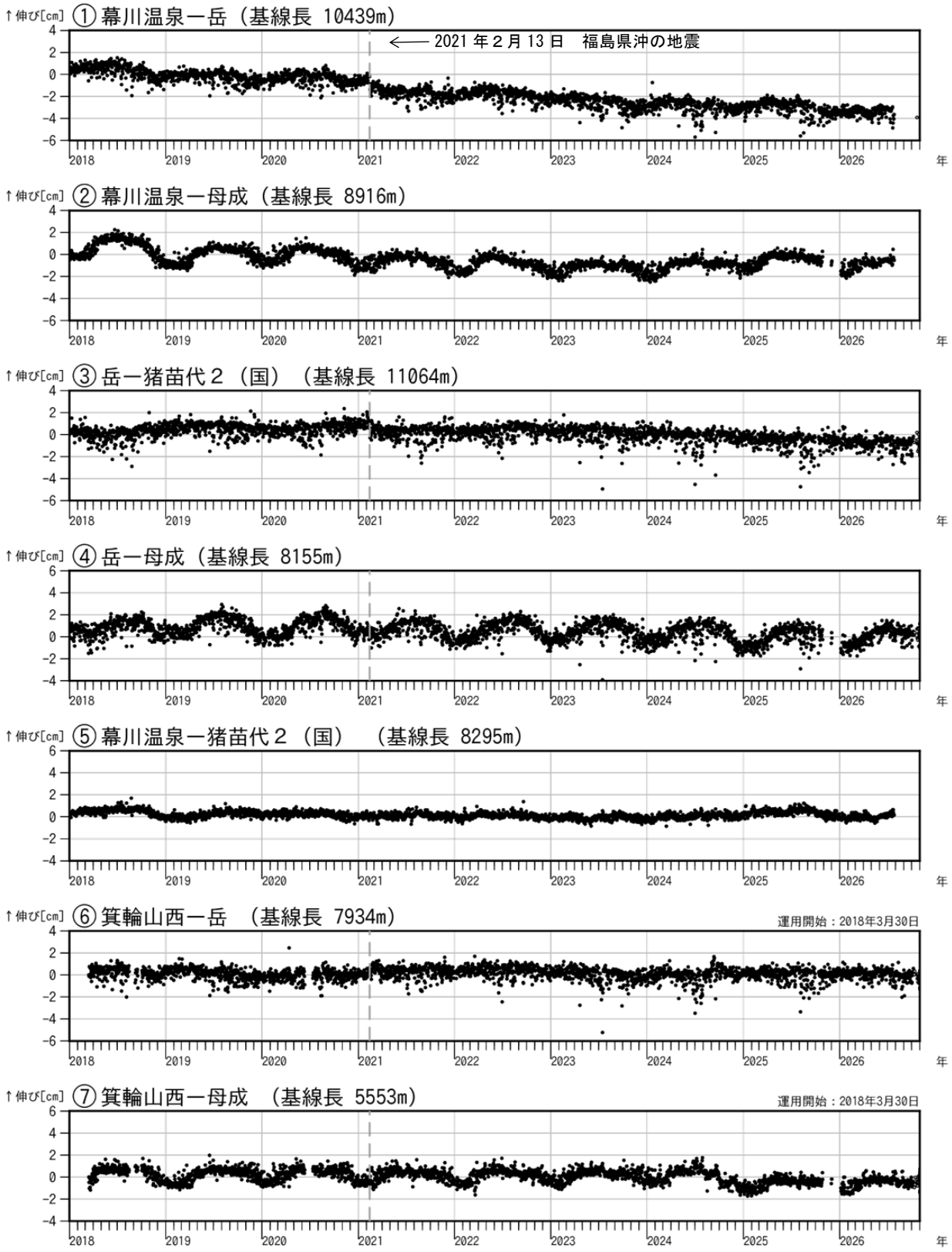


図４　安達太良山　GNSS 基線長変化図（2018 年１月～2026 年 10 月）

・2021 年２月 13 日の福島県沖の地震に伴うステップを補正しています。
・①～⑦は図８の GNSS 基線①～⑦に対応しています。
・空白部分は欠測を表しています。
・（国）は国土地理院の観測点を示します。

火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

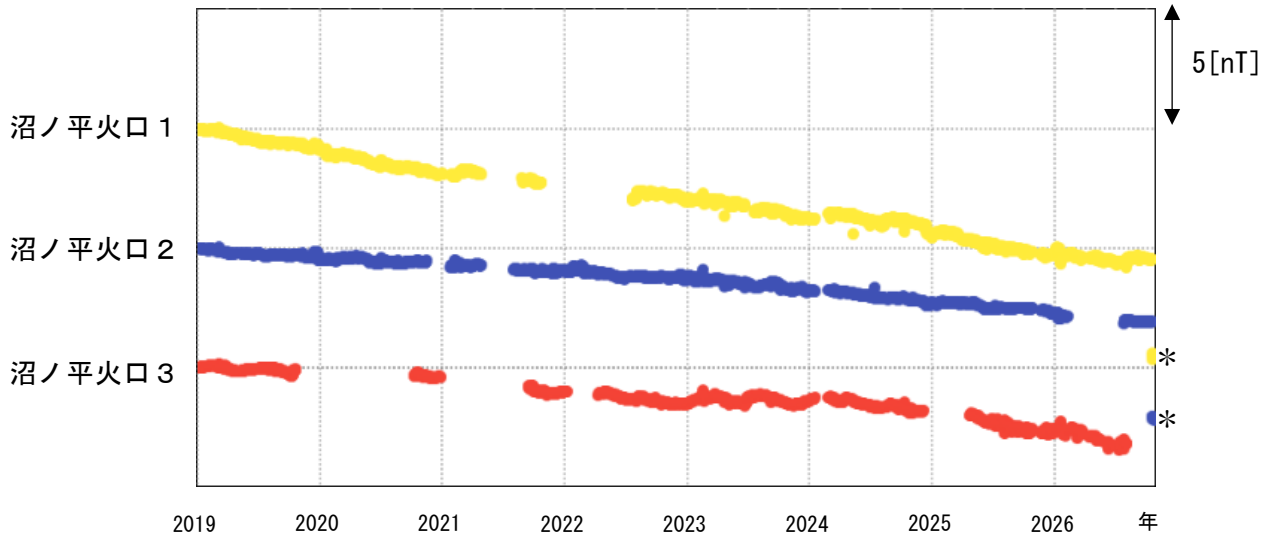


図５　安達太良山　全磁力連続観測結果（2019年１月～2026年10月）

・上葉木坂西観測点で得られた全磁力値を参照値とした場合の各日の夜間平均値を示しています。
・*で示す今期間発生した全磁力値の不連続な変化は、上葉木坂西観測施設の更新に伴うものです。
・各観測点の場所は図７に示しています。
・グラフの空白部分は欠測を表しています。
・年周変動及び磁気嵐等の地磁気の乱れによる変動を除去しています。

沼ノ平火口北側にある沼ノ平火口１及び沼ノ平火口２観測点で見られる長期的に緩やかな全磁力の単調減少は、沼ノ平火口の地下浅部の冷却の進行を反映している可能性があります。

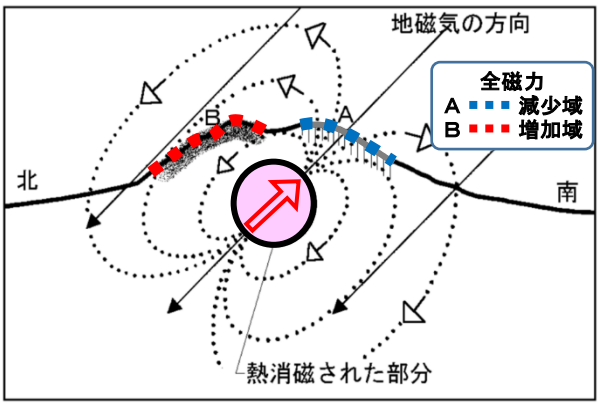


図６　熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で増加 南側で減少	消磁	上昇
北側で減少 南側で増加	帯磁	低下

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方向に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。左図に示すように、火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Ａでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Ｂでは強められて大きくなることがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

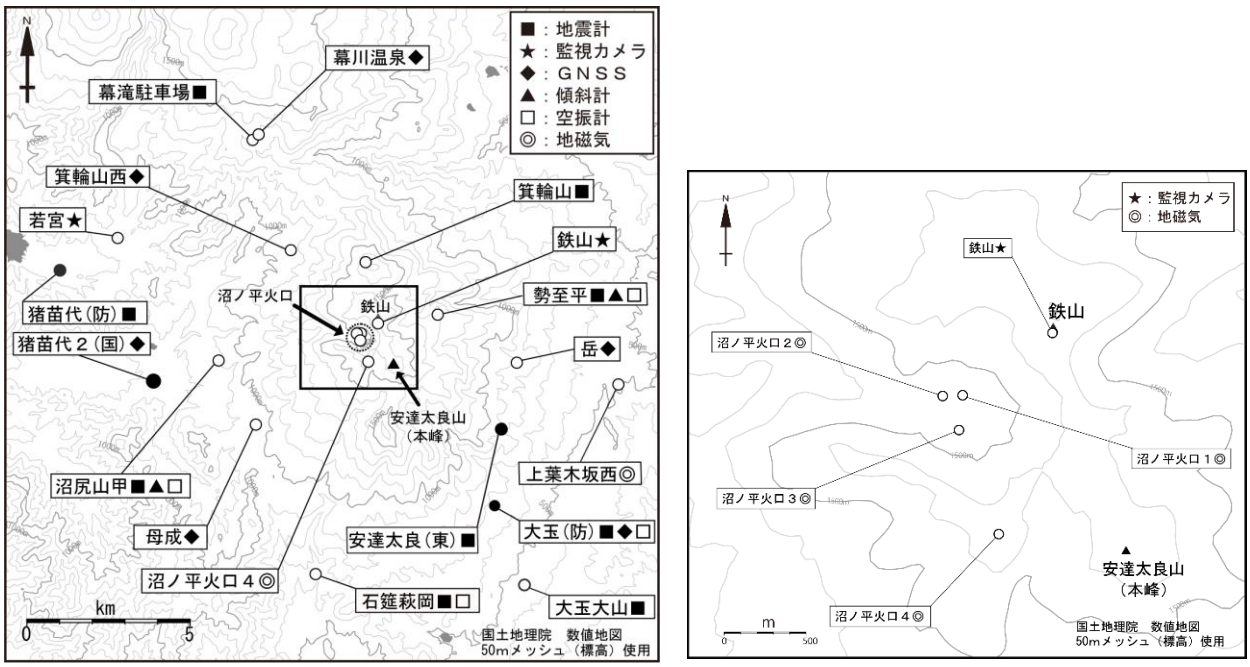


図７　安達太良山　観測点配置図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。
（国）：国土地理院　（東）：東北大学　（防）：防災科学技術研究所

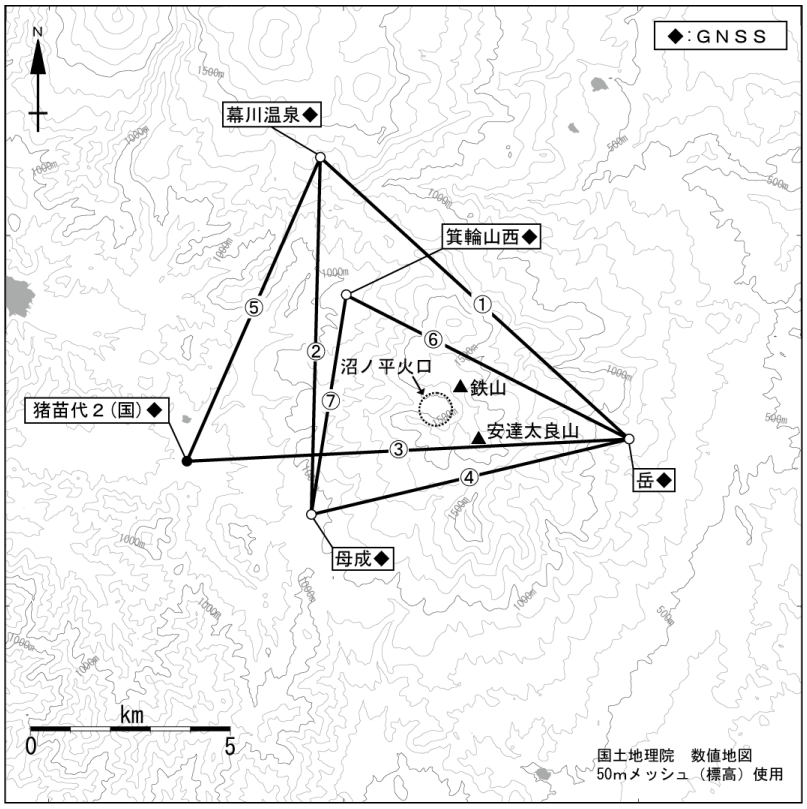


図８　安達太良山　GNSS 観測基線図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院